

「九州文化史」アーカイブ事始め

梶嶋, 政司
九州大学附属図書館記録資料館 : 助教

<https://doi.org/10.15017/1960026>

出版情報 : 九州文化史研究所紀要. 61, pp.21-54, 2018-03-30. Manuscript Library, Historical Records Section, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

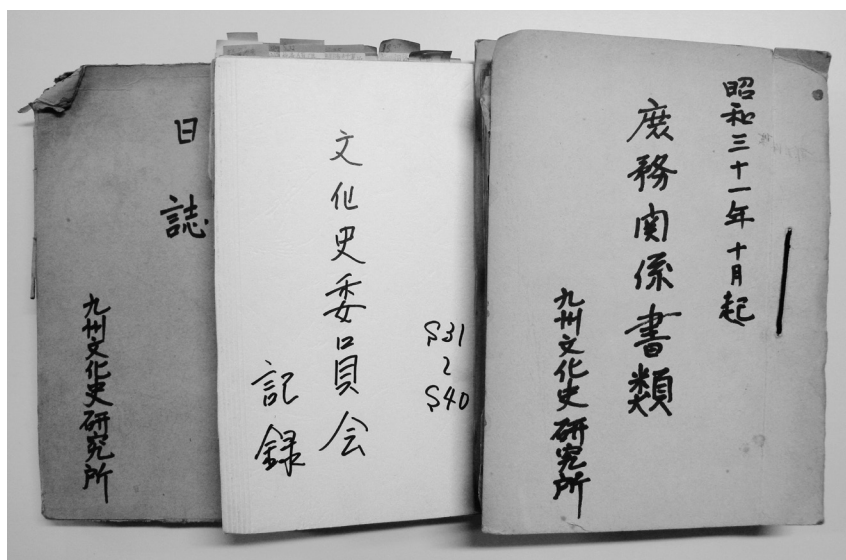
「九州文化史」アーカイブ事始め

梶 嶋 政 司 編

解 題

一九三四年（昭和九）に九州帝国大学法文学部のなかに九州文化史研究所が設置されて以来組織の改編はありつづも、八四年間にわたり箱崎の地にあった「九州文化史」は、いよいよ今年、伊都新キャンパスへ移転する。

移転を間近に控えた記録資料館九州文化史資料部門では、これまで箱崎の地で活動してきた「九州文化史」の学問的伝統を振り返るべく、「展示 金田平一郎と九州大学附属図書館」（九州大学附属図書館・法学研究院主催、於中央図書館、二〇一八年三月一日から二六日まで）を企画した。本展示は、草創期の九州文化史研究所において史料蒐集を主導した法文学部法制史講座金田平一郎助教授（当時）の学問的足跡をたどるものであったが、企画の過程において、当部門内に保管されてきた「九州文化史」事務記録の整理はもとより、大学内外の新聞記事などの調査をすすめ、その結果これまで知られていなかった九州文化史研究所創設の頃のさまざまな記録を集めることが出来た。本稿では、その成果の一部を紹介し、「九州文化史」がかつて持った理想や、その歩みを振り返り、これからの「九州文化史」のあり方を考えていく上でのよすがとしたい。



一、組織の変遷

九州文化史研究所は、九州全般にわたる文化史的な史料の収集と研究を究極の目的として、一九三四年、九州帝国大学法文学部内に設置されたことはすでに述べた。草創期、所員の長沼賢海（国史学第一講座教授）、金田平一郎（法制史講座助教授）、遠藤正男（経済科講師）を中心として、福岡藩の税法、「日田金」と九州諸藩の財政政策、石炭鉱業の発展、切支丹史料とくに宗門帳の四テーマから研究が始まった。発足当初、九州文化史研究所事務室は旧法文学部本館地下教室に置かれていた。

一九四九年（昭和二四）の新学制実施にともない、法文学部の法・文・経三学科が独立すると、一九五〇年から九州文化史研究所は文学部、法学部、経済学部の共同管理となり、大学より予算が付けられた。翌一九五一年三月に刊行された『九州文化史研究所紀要』第一号に収録された「九州大学九州文化史研究所規定」によれば、戦後の九州文化史研究所では、一般文化部門・政治史社会史部門・法制史部門・経済史部門・対外交渉史部門・キリシタン文化史部門の各部門を研究

目的として、史料採訪・整理・保存・複写、慣行調査、研究と発表、紀要の発行を行った。戦前から引き続き九州各地の史料蒐集が積極的に進められていたことがわかる。一九五六年（昭和三一）に三木俊秋が助手に任用されて以降、文化史独自の事務記録が整備されていたことは組織体の歴史を解明していく上においても重要である。

その後、中央図書館古文書部設置計画もあったが、一九六五年（昭和四〇）四月に文学部附属九州文化史研究施設（対外交渉史部門）が発足することになった。法制化された当研究施設においては共同研究が推進されていく。一九七六年（昭和五一）四月には比較考古学部門が設置され、二部門体制となった。

教養部統廃合、学際大学院設置の流れのなかで、一九九四年（平成六）四月以降、大学院比較社会文化研究科に九州文化史研究施設の人員と史料が吸収され、九州文化史研究施設は、学内措置により九州大学大学院比較社会文化研究科九州文化史資料室と改組されることになった。そして、九州大学総合研究博物館設立構想による再改組の動きの中で二〇〇〇年（平成一二）三月末日には同室が廃止されるに至り、当面の弥縫策として、旧「九州大学大学院比較社会文化研究科九州文化史資料室」として運営されることになった。

その後、大学記録研究資料館構想を経て二〇〇五年（平成一七）四月に九州大学附属図書館付設記録資料館が発足すると、旧「九州大学大学院比較社会文化研究科九州文化史資料室」は記録資料館九州文化史資料部門として記録資料館のなかに位置付き、今日に至る。

二、資料について

以下掲載資料についての簡単に説明したい。

資料1『福岡日日新聞』一九三四年（昭和九）九月一八日、および資料2『九州大学新聞』一九三四年九月二九

日は、ともに九州文化史研究所の設立を報じた新聞記事である。資料一では、「西南部地方を研究対象」とする九州帝国大学の学風を「西南学派」と称し、その学風のなかで新たに法文学部に設置された九州文化史研究所が「年と共に散佚する九州地方の文書類の蒐集保存」していくことの重要性を強調している。記事に見られる、明年度二万円の前算要求による研究所設立の計画は結局実現しなかった。

資料3『九州大学新聞』一九三四年九月二九日は、金田平一郎とともに草創期における九州文化史研究所の史料蒐集を精力的に行った経済科講師遠藤正男に関するインタビュー記事である。

資料4～6は、九州文化史研究所の発足から約二年が経過した一九三六年（昭和一一）六月二四から同二六日にかけて『福岡日日新聞』に連載された「九州文化史を探る人々（A）・（B）・（C）」である。長沼賢海（国史学第一講座教授）、三田村一郎（経済科教授）・遠藤正男（同講師）、金田平一郎（法制史講座助教授）の学問や問題関心が紹介されており大変興味深いとともに、発足間もない頃の九州文化史研究所の活動の様子を伺い知ることの出来る貴重な記録である。

資料7は、一九六一年三月に出版された『九州大学九州文化史研究所（紀要第八・九号合併号）創立二十五周年記念論文集』の附録として謄写版で出された「回顧集」である。長沼賢海、宮本又次、原田如一（九州文化史研究所事務嘱託）が執筆している。

翻刻は梶嶋のほか、越坂裕太・川邊あさひ（人文科学府歴史空間論専攻修士課程）が行った。その際、漢字の字体は原則として常用漢字を使用した。

主な参考文献

『九州文化史研究所紀要』第三十九号、九州文化史研究施設、一九九四年
『九州文化史研究所紀要』第四十八号、九州文化史研究所、二〇〇五年
九州大学文学部編『九州大学文学部90年の歩み』九州大学出版会、二〇一四年

資料 1 【福岡日日新聞昭和9年9月18日】(西日本新聞社提供)



「九州文化史」アーカイブ事始め

資料2【九州大学新聞1934年9月29日】

全九州の古代へ遡る

九大文化研究所

愈々開設より充實へ

本學法文學部四番釣室地下室に事務室を設け、「九州文化史研究所」は隔々九月開校以來開設された。その専任委員は本學長沼教授、三田村教授、金田助教授及び遠藤講師が當られることになり、その研究事項は九州全般に亘る文化史的史料を蒐集し、研究し、特に重要な文献はその撰寫、復寫等をなし、全國の斯學研究者の參考に供し又「九州文化史研究所報」なる機關雜誌を發行される由。研究の第一歩として差當り着手される研究事項は次の通りである

- (一) 福岡藩の税法研究殊に税種、税額の沿革的研究を中心として
 - (二) 「日田金」の活躍を中心として見たる九州諸藩の財政窮乏状態並に、それに対する各藩政策の研究
 - (三) 九州の特殊産業としての石炭鑛業發展の研究
 - (四) 切支丹關係書類殊に宗門改帳の蒐集
- 因みにその經常豫算は文部省を経て現に大蔵省に廻付されてゐるが、同研究所設立に關して松浦總長の直接、間接の甚大なる援助が大いに與つて力あるものである。

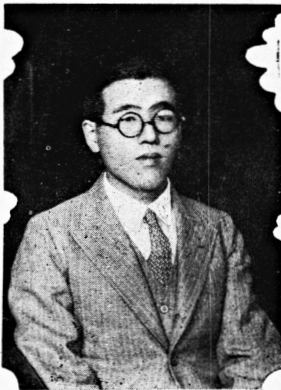
(研究室)をのぞく (四)

史観と資料の問題

特殊研究・日田金

遠藤講師(法文)に聴く

過去の史学者の研究に満足せず、新しい史観の上に立つ新歴史の勃興によつて、日本社会史、日本経済史等に、活潑な氣運がみなぎつてゐる時、本學における眞實な經濟研究者で特に九州地方の特殊研究、殊に日田金の研究に目づいてゐられる遠藤講師を、古い資料の山積する研究室を訪ねて、學界の動向、問題等をきき、經濟史に於て最近注目すべき動向は――



日本經濟史として最近殊に理論的方面に注目する傾向が強くなつて来たことです。これは日本經濟史の研究に當つて、今まで史料的資料のみ閉鎖つて来た反動とも云へるでせう。

この理論的發展は實に目まぐるしい程ですが、而し乍ら現在の學會の問題は――學界ではアジア的生產様式の

問題から、大化改新の國家成立論や、幕末資本主義生産の問題、即ち所謂「エノケナク」の新地主發生産論等々、實に目まぐるしい論争がジャーナリズムで専門雜誌としてゐる「經濟史研究」や「社會經濟史學」等に於ては矢張り忠實

正確な資料に基かない理論は歴史研究に於ては理論なき資料以上に排斥すべきだらうと思ひます。即ち兩者共に備つたものが良いわけで、最近の傾向にはこの兩者が著しく接近しつつあることを見受けま

な資料の検討が多い様です。これとても目まぐるしい理論の進展に影響されて検討の態度はよほど變つて来てはゐるが、九州文化史研究所が出来てから、郷土史家と提携して各地に根本資料の蒐集が各大學で企てられてゐることも一つの注

目すべき現象でせう。この夏、東大の大河内、土屋の諸先生や、京都の黒正先生等も諸所を廻つて居られる様です。九大でも長沼、三田村、金田



はれます。それで資料蒐集の着眼點も主としてこれに置きましたが、殊に面白かつたのは廣瀬淡溪の弟久兵衛の福岡藩に對する赤字克服策で、資料も充分あり面白いと思ひました。その福岡藩の赤字克服策に就ての建白御内密口上書の内容を觀ると、先づ第一に大阪

へからの賣出方法の改良から積、更に生絲會所の改革等に就て詳述に述べ、經費節約及び生産増進に多くの改良すべき點を指摘してゐますが、久兵衛の意見に於て特に注目すべきは、それまでの建白の多くは消極的な經費節約に重點を置いたのに反し、彼は積極的に生産の擴張を主としたこととす。久兵衛の「御内密口上書」の他にも一ツ「兩國日記」がありますがこれは彼の事業日記とも云ふべきものでこれに依つて彼の事蹟がはつきりうかがはれます。

極く簡単に述べましたが、こうした事の調査はやがて現在に於ける政策の樹立にも何等かの意義を與へるものではないでせうか？

現在の對策等に就ては何とも云はれませんが、徳川時代の諸政策は精々検討して夏休中の收帳を生かして行き度いと思つて居ます。

資料の寫眞をどうぞ。――
先生の出されたのが、何と一萬八千兩の借附證文だ。聚漸より、日田の借屋へ貸金の形式による一種の預金の證文ださうである。

「九州文化史」アーカイブ事始め

資料 1 【福岡日日新聞昭和9年9月18日】

九大法文学部にて九州特異文化研究

明年度予算に二万円を要求し研究所設立の計画

日本に於ける「西南学派」を以て任ずる九州帝大では、その地理的特異性による西南部地方を研究対象とし、医学部に於ては九州地方の風土病を始め熱帯医学、植民衛生、工学部では石炭、製鉄、農学部では南海の生産学的研究を始め熱帯農業の研究に於て夫々特異性を認められてゐるが、同大学のうちでも最も新しい歴史をもつ法文学部でも、此の西南派の伝統学風をとり入れて、九州地方の特異文化史の研究が計画され、今年度は不如意の予算のうちから一千元を絞出して既に同研究に着手、明年度に於ては九州地方文化史研究所の創設費として二万円の予算を新規要求してゐるが、同研究所は文部省でも非常に乗り気となり賛成既に右新設費予算は大蔵省に廻附されてをり近く行はれる同省の査定に成否の運命がかけられてゐるが同研究所は年と共に散逸する九州地方の文書類の蒐集保存の上から云つても極めて有意義なるものとして松浦総長や豊田法文学部長以下何れもその新設要求の容れられん事を希望してゐる、則ち法文学部では

国史学を担任する長沼、竹岡両教授、史的分野に於て、法制史の金田助教授は法制史的立場から又経済の三田村教授、遠藤講師等は経済史的立場から九州地方文化の研究を行つてゐたが

その研究費も乏しく、三者有機的結合もなく、不満に感じる事が多かつたので、今回総合的な九州文化史研究所の設立計画が進められるに至つたが、研究所のメンバーは長沼賢海教授を委員長とし、三田村一郎教授、金田平一郎助教授、遠藤講師等を委員とし、先づ

- (一) 九州各藩の財政々策、同人口政策、その他藩政一般
- (二) 九州各地方の経済的研究
- (三) 石炭に関する研究
- (四) 九州地方に於ける切支丹文化の研究等

に就いて調査の手を延べる事になつてをり既に、黒田、小笠原（小倉）両藩や、日田の千原家（日田金）その他に就ては法、文、経三科の総合的研究が進められて、その研究完成の時が期待されてゐる、なほ同研究は今のところ徳川時代以後に限定されてゐるが、目下要求中の二万円の研究所創設新規要求が容れられ、ば専任の助教授、助手等をおき（所長、教授は兼任の予定）その研究範囲も古代にまで溯り、建国以来の九州文化史に亘つて研究する事になつてゐる。

非常時だ、どうなるか見当がつかぬ

予算問題留学生問題等々松浦九大総長語る

九大総長松浦鎮次郎氏は上京中のところ十七日午前十一時八分博多駅着列車で帰福したが予算問題留学生問題に就て左の如く語つた

「何しろ非常時で軍部予算が多きい為他の方では新規事業費の如き何うなるか見当がつかない、内務省の新規要求は一割に査定され残り九割は不承認になつたといふ有様だから文部省の方は何うなるか心細いはなしだ。本大学の新規要求は、理学部の新設、航空学科、建築学科等相当あるが、時節が時節だから認められなくば諦らめねばなるまい、法文学部九州地方文化研究所の費用は、有意義なものだし且つ速やかに出来上らねば史料の散逸する心配があるので是非承認されたいと希望してゐる、海外留学生も文部省が先年経費の大節減をやり、急には元通りになり得ない事情にあるので本大学から二人もゆければ結構だと思つてゐる、愈々決定するまでには未だ相当時日があり、早く今年末遅ければ明年春の年度頃でなければ判らぬかも知れない

資料 2 「九州大学新聞 1934年9月29日」

全九州の古代へ溯る

九大文化研究所

愈々開設より充実へ

本学法文学部四番教室地下室に事務室を設け、『九州文化史研究所』は弥々九月開校以来開所された。その専任委員は本学長沼教授、三田村教授、金田助教授及び遠藤講師が当られることになり、その研究事項は九州全般に亘る文化史的の史料を蒐集し、研究し、特に重要な文献はその模写、復写等をなし、全国の斯学研究者の参考に供し又『九州文化史研究所報』なる機関雑誌を発行される由。研究の第一歩として差当り着手される研究事項は次の通りである

(一) 福岡藩の税法研究殊に税種、税額の沿革的研究を中心として

(二) 「日田金」の活躍を中心として見たる九州諸藩の財政窮乏状態並に、それに対する各藩政策の研究

(三) 九州の特殊産業としての石炭鉱業発展の研究

(四) 切支丹関係書類殊に宗門改帳の蒐集

因みにその經常予算は文部省を経て現に大蔵省に廻付されてゐるが、同研究所設立に関して松浦総長の直接、間接の甚大なる援助が大いに与つて力あるものである。

資料3 【九州大学新聞1934年9月29日】

研究室をのぞく(四)

史観と資料の問題

特殊研究・日田金

遠藤講師(法文)に聴く

「九州文化史」アーカイブ事始め

旧来の史学者の研究に満足せず、新しい史観の上に立つ新興史学の勃興によつて、日本社会史、日本経済史学会に、活発な気運がみなぎつてゐる時、本学における真摯な経済史研究者で特に九州地方の特殊研究、殊に日田金の研究に目下従つてゐられる遠藤講師を、古い資料の山積する研究室に訪ねて、学界の動向、問題等々をきく。

経済史に於て最近注目すべき動向は――

日本経済史としては最近殊に理論的方面に注視する傾向が強くなつて来たことです。これは日本経済史の研究に當つて、今まで虫喰ひ資料にのみ閉籠つて来た反動との云へるでせう。

この理論的發展は実に目まぐるしい程ですが、而し乍ら正確な資料に基かない理論は歴史研究に於ては理論なき資料以上に排斥すべきだらうと思ひます。即ち両者共に備つたものが良いわけで、最近の傾向にはこの両者が著しく接近しつゝ、あることを見受けます。

現在の学界の問題は――

学界ではアジア的生産様式の問題から、大化改新の国家成立論やら、幕末資本制生産の問題、即、所謂マニユフアクチュアの問題更に農村に於ける新地主発生論、等々、実に目まぐるしい論争がジャーナリストクに繰返されてゐます。然し、専門雑誌としての「経済史研究」や「社会経済史学」等に於ては矢張り忠実な資料の検討が多い様です。これとても目まぐるしい理論の進展に影響されて検討の態度はよほど變つて来てはゐますが。九州文化史研究所が出来るさうですが――

郷土史家と提携して各地に根本資料の蒐集が各大学で企てられつゝ、あることも一つの注目すべき現象でせう。この夏、東大の大内、土屋の諸先生や、京都の黒正先生等も諸所を廻つて居られる様です。

九大でも長沼、三田村、金田諸先生が九州の諸資料蒐集のために努力されており、また最近文化史研究所も設立されやうとしてゐますが、九州文化發展の趨勢から見て非常に意義深いこと、思ひます。私も出来るだけお手伝

へして見度いと思つて居ります。

先生もこの夏御旅行されたとうかゞひましたが收穫は――

矢張りその關係で夏期休暇中北九州を廻つて、豊澤^(註)(小笠原家)、森(久留島家)、秋月(黒田家)等を歩いて九州の經濟状態を知るに重要な資料が各所に残つてゐるのを知りましたが、主たる目的が日田にあつたので最も多く日田の資料を集めて來ました。

先生の御研究で最も興味を御持ちになつてゐる点は――

各藩の藩政政策に就てゞす。高利貸資本等の影響下に青色吐息の諸侯が、如何にその藩の赤字を克服せんとしたか？現在の赤字財政と對比して、当時の対策及それに関する理論等が面白い問題であると思はれます。

それで資料蒐集の着眼点も主としてこれに置きましたが、殊に面白かつたのは広瀬淡窓の弟久兵衛の福岡藩に對する赤字克服策で、資料も充分あり面白いと思ひました。

その福岡藩の赤字克服策に就ての建白「御内密口上書」の内容を観ると、先づ第一に大阪^(坂)への米の売出方法の改良から積極的な國産奨励とか藩營事業、更に生蠟会所の改革等に就て詳細に述べて經費節約及び生産伸張に多くの改良すべき点を指摘してゐますが、久兵衛の意見に於て特に注目すべきは、それまでの建白の多くは消極的な經費節約に重点を置いたのに反し、彼は積極的に生産の拡張を主としたことです。久兵衛の「御内密口上書」の他にも一ツ「南陔日記」がありますがこれは彼の事業日記とも云ふべきものでこれに依つて彼の事蹟がはつきりうかゞはれます。

極く簡単に述べましたが、こうした事の調査はやがて現在に於ける政策の樹立にも何等かの意義を与へるものではないでせうか？

現在の対策等に就ては何とも云はれませんが、徳川時代の諸政策は精々検討して夏休中の收穫を生かして行き度

いと思つて居ります。

資料の写真をどうぞ——

先生の出されたのが、何と一万八千両の借用証文だ。某藩より、日田の掛屋へ貸金の形式による一種の預金の証文ださうである。

資料 4 【福岡日日新聞昭和11年6月24日】

学界断層図 九大の巻22

海賊の研究に没頭

文化史の側面を闡明

法文学部の長沼賢海教授

九州文化史を探る人々 (A)

文部省の直轄研究所としていま羽振りのいい、国民精神文化研究所の名付親は実に九大法文学部の教授会である。学生思想の善導も行詰まつたと云われた頃、法文学部のお歴々が頭脳をしぼつて考へ付いたのがこの国民精神文化研究所で、科学的に日本文化の研究をやり、先づ国休を明徴にし

〈邪悪思想を説伏しようといふのだ。早速文部省に予算を要求〉

したところが、これを見た文部省が九大には一言の挨拶もなく、横取りして終つたので、創案者の法文学部教授会は、鳶に油揚げを攫はれた恰好でポカンとして終つたものだ、それから例の満州事変が勃発し、日満関係が不可分となるや九大では早速満蒙産業文化研究所の設立を計画したが、この新規事業費としての十三万円の子算は鳩山文相時代に幸ひ文部省を通過したので、大に期待してゐたところ、今度は大蔵省で握りつぶされ、未だ実現を見

ない。大澤教授等が三四年來熱心に主張してゐる東洋文化の綜合研究所案の如きは、滿蒙産業文化研究所の変形だが、その実現は時節柄前途遠慮であらう。そこで三度目に立案されたのがこの九州文化史研究所である。何しる時は未曾有の軍事膨脹時代の事だ。

〈文化史研究所の費用なんかホンの僅かばかりだが、それさへ〉

文部省を通過せず難産だつたのを本部から松浦総長のへソ練りを貫つて細々ながらうぶ声を挙げたのは一昨年のことだ。文部省の公認予算によらない日陰もの、研究所の事として、法文学部の地下室の一隅に小さくなつて店を開き、折角松浦総長の努力によつて文部省から公認される晴れの日を待つてゐるが、何しろ赤ん坊だつて三年たてば独り歩きが出来ると同様この九州文化史研究所も益々内容充実して、長沼主任教授以下所員の意氣颯爽としてゐるのは嬉しい

長沼賢海教授：読者よ、この教授の名前の中に抹香臭いものを嗅ぐことが出来るであらう。教授は越後の名利高田の浄興寺々内の正光寺の住職であるが、厳密に云へば氏に僧籍はないのだ。何故なら、教授の住職である正光寺は、明治二十年代に、本願寺の宗政寺法に反逆して起ち、その屋台骨をゆすぶつて本願寺の門徒を震憾させた有名な浄興寺と行動を共にし、遂に浄興寺以下十三寺は本願寺から破門され文部省では未だに別派としても公認されてゐないからだ。

〈ところで、僧侶と海賊、この二つはおよそ縁遠い二つではあ

るが、長沼教授と海賊との関係は実に深い。長沼教授が海賊の研究を始めたのは随分古いことで、広島高師の教授時代の、瀬戸内海に蟠居した村上海賊の研究は有名なものだが、九大に来てからは専ら九州海賊の研究に没頭、平戸の松浦一党を始め、九州西海岸に蟠居し大明の人々をふるへ上らせた倭寇の事蹟を明かにし九州文化史の側面を闡明した功績は甚だ大きいと云はねばならない。四国の村上氏と共に、玄海から支那海に亘つて覇を唱へてゐたの

は松浦党であるが、これは海賊としては異色のある連盟組織をもつてをり、その間鄭成功など、支那人や朝鮮人なども交つてまことに劇的な存在でもあつた。その松浦海賊の内容は従来不明とされてゐたのを

〈長沼教授は、松浦海賊の一党であつた島の青方家の文書によ〉

つて始めてその全貌を明らかにしたのである。これによれば、松浦党とは平戸を中心にした海賊の集団であり、一党のことは万事合議制によつて決定したり、他の棟梁中心の海賊とは非常に違つた組織であることや、本来血族関係のない他人の集まりなので個人的の問題に関しては本姓を名乗るが、集団的な場合には松浦姓を名乗つたこと、遂には系図まで同じにして終つてゐることなどの外元寇に際しては五島にも防塁を築き防備した松浦一党の奮戦振りも如実にうかがはれて非常に興味ある事実が判明したのである。また、北九州の海賊に就ては、長沼教授は筑前宗像神社の大宮司宗像氏や、糸島郡の志渡神社別当中村氏、八幡の麻生氏等々何れも錚々たる海賊であつた事実を明らかにしたが、神官である宗像氏の如きは既に平安朝時代から海賊として栄えてゐたといふ。

〈また最近は、肥前名護屋や天草の崎津同高濱長崎懸野茂崎備〉

中玉島等々の宗門改帳を蒐集して整理中であるが、野茂崎の如きは数百年に亘る二百冊からの宗門改帳が保存されてをり、これによれば、当時の人口増減の事実が判るし、且つ藩主の人口政策等も知ることが出来過去の国勢調査ともなるので、同帳の整理が各方面の史学者から待たれてゐる。

【法文学部文科国史学教授長沼賢海氏】

資料5 【福岡日日新聞昭和11年6月25日】

学界断層図 九大の巻23

貴重な資料により

全貌を現した日田金

三田村、遠藤氏等の大収穫

九州文化史を探る人々（B）

九州文化史研究所が、三ヶ年に亘る資料蒐集に於て最大の発見とも云ふべきは「日田金」と対馬宗家の「奴婢制」に關する資料である。一口に資料の蒐集と云つてしまへば、それまで、はあるが、幾百年も埋れてゐた文書の中から所謂學問的価値ある資料を選択蒐集する事は必ずしも楽なことではない。常ならば、大学では厳めしく構へた教授も

〈何百年來の塵埃の溜つた薄暗い蔵の中へ真裸で入り込んで〉

アセリまはるのである。古鼠なんかまだしもだこ、を安息所とする青大将の平和な夢を驚かして——尤もどちらが愕かされるかは問題だが——汗ダクで探す其苦心は大したものだ。九州文化史を探る裏には、史学者の人知れぬかうした苦心のある事を先づ記憶しておいて頂きたい

さて、春、大地の温かみの中から若草の萌え出づるやうに、封建社会の温床の中から萌え出でた商業資本すなはち大阪の両替商、蔵元、掛屋、江戸の札差等々が何れも典型的な商業、高利貸資本家として存在した事に関しては、日本經濟史学者に於て既に研究されてゐるところであるが、地方のそれに関しては殆んど閑却されたと云つてよい。〈たとへば庄内酒田の本間家、加賀の木谷錢屋五兵衛等は中央

のそれとは若干性質は異なるが、兎に角地方的特異性をもつ商業高利貸資本家だと見てよいが、これらと同じく九州に於けるその代表的なものは実に豊後日田に生成發展したもので「日田金」の名に於て呼ばれる日田掛屋八人士である。この「日田金」に就ては曩に竹越三叉の「日本經濟史」に於ける記述があるが、九大法文学部經濟科の三田村一郎教授、同遠藤正男講師等九州文化史研究所のメンバーによつて発見された貴重な資料によつて、始めて「日

田金」はその全貌を明らかにされたのである。

幕末日本の経済史、わけて九州地方経済史上に占めるこの「日田金」の意味は大きい、豊後の日田町：盆地の中におき忘れられたこの町は、今は遊覧地としてのみ有名である、読者はこの山の中に殆ど全九州に亘つて金融支配権を握つてゐた「日田金」の生成発展したことを意外に思うであらう。だが、こゝには古くから金山があつたこと、そしてその封建時代の地理的関係を考へるならすべては諒解されるであらう、日田は豊後の西北端の盆地にあり東は玖珠郡、西は筑前、筑後、肥前に接し、南は肥後、北は豊前田川郡に境し全九州支配には最も優れた地の利を得てゐるのである

〈四方は山に囲まれてゐるが、西方には夜明の谷がありこゝよ〉

り流れ出る三隈川、花月川はやがて筑後二郎となつて海に注ぎ更らに遠く長崎との舟運を便ならしめてゐる。陸路は東は由布を経て日出から海路馬関に出られるし、西は宰府から博多、北は中津、小倉を経て海路に通じてゐるから、この日田を中心にした交通は絡繹たるものがあつたであらう。

のみならず附近には金銀、木材の資源が豊であり、河川の流れと米産とは酒造業を繁昌させ、所謂収益の蓄積が可能であつた事がこの日田掛屋を生むに至つたのであるが、然しこの日田掛屋をして決定的に全九州に高利貸資本を拡大せしめたものは実に幕府の政策が与かつて力ある事実も見のがし得ないのだ。

〈天領の日田に生成した掛屋八人士は幕府の権力と結んで殆ど〉

全九州の諸侯を金融を通じて押へることが出来たのだが、幕府は寧ろこの掛屋を保護した形跡さへ見えるのだ、掛屋八人士と云はれる千原幸右衛門、草野忠右衛門、廣瀬源兵衛、手島儀七、山田半四郎、森甚左衛門、山田作兵衛、山田為左衛門等は何れも名字帯刀を許されてゐたのである。

「日田金」の高利金を借りてゐたのは百姓町人にもあつたが——熊本藩では日田金を借りるなどの禁令を出してゐる

——九州諸侯や武士が最も多かつた。現在発見されてゐるうちで、日田金を借りてゐないのは薩摩の島津と佐賀の鍋島の両藩だけだが、最も近い関係にある筑前福岡藩、筑後久留米藩、豊前小倉藩、筑前秋月藩、筑後柳河藩等はその代表的なものである。三田村、遠藤両氏が両千原家、廣瀬家、小倉藩、森藩だけの残存文書によつて調査した諸侯の借金はおよそ百万七千四百両（現在の金では二十四万八千円）となつてゐるが、これは天保一慶応年間の貸借を差引してゐるので正確とは云はれないが、大凡の見当はつのである。即ち借り頭は日田郡代で二十四万二千両、小倉藩二十万七千六百両、秋月藩十二万六千両

〔福岡藩十万二千両久留米藩九万六千両森藩四万一千両千束藩〕

七万一千二百両、対馬藩二万六千両、臼杵藩二万四千両、その他柳河、大村、杵築、府内、島原、延岡、蓮池、唐津、竹田、鹿島、厳島の諸藩であるが流石のお国大名もこの金融業者の前には頭が上がらず、「茂重畳申合居候間甚だ御迷惑之次第には候得共右日限迄御待可被下候云々」——と謝罪状を出してゐる始末である。封建時代の社会機構の上に大きく根を張つてゐた「日田金」も封建制の崩壊と共に大名への貸金も貸し倒れとなり没落せねばならなかつた。だがこの日田商人の新田開発の事實は、近頃論壇の問題とされてゐる「地代論」の論争に關して有力な一論拠を与へる資料である事を附加しておかう

(イ) 近世日本の農業は完全な資本主義化が行はれたとする説、(松好氏) (ロ) 全然資本主義的要素はなく封建的であるとの説、(山田氏) (ハ) 完全な資本主義化でもまた純然たる封建的でもないとする説 (向坂氏、土屋氏) 等三つの説に對して、これは最後の (ハ) 説に有力な論拠を与へる資料であるからだ

【法文学部経済科教授三田村二郎氏(上) 同講師遠藤止男氏】

資料6 【福岡日日新聞昭和11年6月26日】

学界断層図 九大の巻24

永代身売の証文や

対馬宗家の、奴婢帳

法制史の金田助教教授の掘出もの

九州文化史を探る人々（C）

「天孫降臨」の神話にからむ高千穂時代のことは説くまい。下つて万葉時代には、筑紫の火の国は、また夢幻的な詩の国でもあつた。おしなべて大陸文化の撰取時代には九州は文化の尖端をゆく時代の先駆者としての大きな働きをもつてゐた。更に王朝時代ともなつて日本文化の華絢爛たる頃には文化の中心に隔絶した地理的理由によつて国内文化の滲透力は弱く、従つてその文化的影響も遅れざるを得なかつたが、然し未だ海外交通の要衝として、内外文化の折衝点として特異な地位を誇つてゐた。かうした九州の地理的關係の特異性は必然にその文化にも特色づけ

（いはゆる九州型の存在が學者によつ主張せらるゝのである）

九大の九州文化史研究所の如き、斯うしたところに目標を置いて研究陣を張つてゐるが、同所員であり法科法制史の担任助教教授金田平一郎氏の如きはわけてその熱心な「九州型文化」の研究者である。金田助教教授は最近旧対馬藩主宗家の文書中から夥しい奴婢帳を発見非常な興味をもつて整理中であるが、この対馬は、大陸文化の撰取時代には、その文化的中継地でもあり、謂はゞ日本の前衛としての立場にあつた、日本最初の銀山は先づこの対馬で開発せられたことは、経済史上に有名であるが、この対馬では、徳川時代になつてズーツと後代、幕末の頃まで中世の名残りをとゞめた奴婢制が存続してゐたことが発見されたのだ。絶海の孤島に於ける事として従来中央の学界にも知られずに埋もれてゐたのが今回発見されたのだがこれこそ学界に於ける貴重な掘出しものなのである。刑罰として

の奴婢の制は、中世まで嚴存し罪を犯したものは従来の身分を失ひ奴婢とされたものだが、近世以後は、實際には余り適用されてゐなかつたのだ

〔徳川幕府に於ける御定書にも「奴」の刑罰が一箇条見えてゐる〕

がこれは重婚の女に限つて科せられたもので、それも実際には殆ど活用されず、此種の女は「吉原へ賜り」強制的に女郎にされた事が史実には見えてゐる最近金田助教授が発見した史料によれば幕府はこの種の女を場合によつては女日照りで渴してゐる村へやつて結婚させたことが知られたが、これは恐らく日本では唯一の強制結婚の例だらうと言はれてゐる、ところで対馬では幕府に於てすら實際に適用しなかつた「奴婢制」が極最近の文久年代までも實際に広く活用されてゐたのである。宗家の蔵から発見された「奴婢帳」「奴婢下され帳」「科人帳」「罰責帳」に記録された奴婢は随分多いが、大部分は窃盜、出奔、博奕、狼藉等の罰として奴婢にされたものだが、數に於ては男の奴の方が女の婢より断然多い。この奴婢とする年限は勿論罪状によつて違うが三年、五年、七年、十年、永代の五種に分れてをり主に百姓町人だけで武士には適用されなかつたものらしい

〔尚ほ親や夫の罪に縁座した妻子で奴刑を科せられた者も相当〕

ある恋に生きる島の若者たちが出奔して「三年切奴婢に被成下」との判決を下されでもしたらそれこそ「紅涙」はしほる程にも流れたことであらう。然も面白いのはこの「奴婢下され帳」のもつ意味である。「下さる」とか「賜はる」とか云へば、まことに有難い事の様だが事實は藩主が無役の科人を養ふ代りに領民にこれを「賜つた」もので貰つた者は科人の逃走に対しては責任を負わされるし、時には科人で乱暴者や怠者もゐたであらうし、甚だ迷惑がつてゐた事もほの見えてゐる、また無用になつた奴婢は一応藩主へ返還し、この奴婢は更に他の者へ下された事も記録されてゐるが、これは一種の租税の変形とも見えるのである。

それから徳川幕府時代の懲役制度は一般に幼稚で江戸では寄せ場人足に使はれた位のものだが、当時九州の懲役制

度は最も進歩してをり、就中熊本藩の宝歴(歴)以後のそれは日本で一番進歩した制度として有名である。ところが最近金田助教教授によつて小倉、佐賀両藩の懲役制度もそれに劣らず進歩してをり、小倉藩の如きは軽罪のものには丸に懲の字を入れた半纏を着せて行商に出したり——半纏は籠の中へ入れてをれば着なくてもよい——外泊を許したりしたものだといふが、近頃行刑上の画期的新傾向だと云つて騒がれてゐる囚人の外出どころか、外泊さへが九州では既に古くから許されてゐたんだから面白い。然し

（一休にその内容に於ては時代と共に進歩的だつた九州文化は）

形式の上では、甚だしく遅れ、徳川時代に於てすら中世の安土桃山時代の面影を残して所謂「九州型」を見せてゐるものが多いが、これこそ九州文化の特異性として強く主張されるころなのだ、この傾向は九州方言の中にも随分強く現はれてをり中世までの流行語であつたオギノリ（押し売り）の言葉は貝原益軒の歌道訓の中にも記されてゐるのも知ることが出来るが法律語としては返還を納所、永代に売り渡すことを永代相伝と書いて中世の形そのまま、である。

最近金田助教教授は、長崎奉行所の犯科帳二百冊許りが、長崎図書館に所蔵されてゐるのを知り、近く此犯科帳に就て研究する事になつてゐるがこれは日本に於ける最古の国際私法の研究として期待されてゐるが、また対馬で発見された「巖牆集」は徳川幕府初期のお仕置裁許帳二冊を元禄十一年に書写したもので、上野の帝国図書館所蔵の原本と共に法制史上貴重な資料であり、また同助教教授が最近四国で発見した永代人身売買の証文の如きは、本人だけでなくその妻子まで一緒に売り渡したもので吾国唯一の貴重な証文として史学者から垂涎されてゐるものだ

【写真は、(歴)福島県麻植郡学島村池北家旧蔵の人身永代売渡証文と金田助教教授】

九州文化史研究所の起り

長 沼 賢 海

九州文化史研究所の起りと言う程の事にはならないかも知れません。寧ろ同研究所の起原の豫兆とでも言うべきことがあつたのを、今懐い出すのであります。年を取つていよいよ記憶がわるくなつて居りますから、記述の歴史性には自信もなく、全く老後の昔話に過ぎません。

昭和八九年の頃、一日松浦総長から事務員を使として態々私を本部に招きました。早速総長に会うと突然「事務員一人使つてくれませんか、給料は本部で出します。」言々と言うことでありました。当時私は海賊史料の掻き集めに夢中になつて居た時でもありましたので、総長は私に学生を提供しようと言うのであろうかと莫然と考えたよりでありました。何分にも突然の申出でもあり、其の座でも史料蒐集と考うようなことなどについて、豫備的の話もなかつたので、私は判然と総長の意中が把握なかつたので、有難う御座いますという挨拶もしなかつたことを後で後悔したように憶います。勿論此の申出では私個人に對するものであつて、文学科かと国史科かと言うものが考えられて居たのではなかつた。併し一教授個人と言つてもそれは勿論学部教授であると言う事を私は感じましたから数日を経てこれを教授会でありのまゝを報告して若し特に写本の必要のある方は私まで申出で下さいと披露しました。

当時史料の蒐集と言つても、差当り私が目標にしている狭い範囲のものであつては学部全体の為めにはならないと思ひ、最初に写すべきものゝ選択にまよいました。

偶々其の頃木下讚太郎氏(?)から市内榎田神社に博多津要録と言うものがあることを聞いて居りましたから、同社についてそれを見、まづこれを写すことに致しました。此の本は約十冊ばかりの内才一冊が欠けて居ました。その後機会ある毎に欠本を補おうと思いましたが、今に果されないのです。

松浦総長はこうした史料の蒐集の実状を知つたが為めか、或は本部と、さしむけられたこの事務員(学生)との關係上の都合があつたが為か、一兩年を経て事務員を本部にかえらせ、其代り年二千円(?)の豫算を本部から学部提供してくれました。それで法経文から委員を一八づつ出して、与えられた豫算で史料を蒐集することになりました。此の時の委員は日本法制史主任金田教授、日本經濟史担任宮本教授と私と三人であつたかと思ひます。当時の本所の設備は東京大学の大日本史料編纂所に比べて、比較にも何もならなかつたのですが、同編纂所では手をつけていない江戸時代の地方の民政史料を目標といたしました。自然各地の庄屋記録などは其まゝ集めることとし、最初に備中(岡山県)玉島町の旧庄屋守屋家の記録百貫目を(一貫目五円)五百円で譲り受けましたが勿論そんな費用はなく、図書館から援助して貰いました。恐らくこゝが史料買収の初途であつたかと思ひます。私が停年退職後九州文化史研究所の名目も出来(私どもの時代には何と言つていたか忘れました)追々豫算も増加して今日の整備を見るに至りました。勿論後任教授語彙の活躍のためものであります。

その頃の思い出

九大に転任することになったのは昭和十七年七月のことだ。大平洋戦争のはじめ、まづ二年目、まづたくやゝこしい時代だった。速藤正男氏の有名な「日田金」研究の場であり、九州文化史研究所というのがあつて、日田金やその他の資料をあつているといふことはかねて聞き知つていたし、落ちついて九州のことを研究したいという意欲にみちて赴任したものだ。着いた時には、もう長沼先生は御退官になつていた。かねて雇傭史研究や大阪の法制のことで知つていた金田平一郎教授と、九州文化史研究所のあの地下室の部屋でかたりあつたのは着任早々のころであつたと思ふ。

あの頃の研究所の仕事はあちこちで史料をかりて来て筆写本をつくることにあつた。戦争中のさわがしい中を私は金田教授とそれでも、年数内は史料採訪をしたように思う。佐賀の内庫所へいき、武雄や日田にはしばしばいつた。長崎の県立図書館へもよくいつた。金田さんは犯科帳をその頃写していられた。幕府法と藩法とを対照的に調査するのが金田さんの眼目であつたようだ。多久へいつて聖廟をたずね、図書館にある林政史料をたずねたのも思い出される。その頃は食料を買い漁ることも旅行のたのしみの一つで、まづたく史料採訪か飼料採訪かよくわからなかつた。北条さんや中村君などの写字の要員の人も共々いつたものだ。箱島氏がはいつてこられたのはその頃のことだと思ふ。あの頃の文科の人々は研究所にはあまり関心を持たずまづたく法科の金田さんと経済科の私とが主として担当しており、金田さん

は毎日のように地下室の部屋に出勤されて、督励されていた。私もいつもこゝに落ち合つて、金田さんと談合したものだ。実に楽しい時代で、まだ敗戦の色が濃厚でなかつたので、至極ノンビリと談合し、珍しい史料を獲てはよろこびあつたものだ。長崎や薩摩の貿易史料はその頃の私が筆写してもらつたものだ。

柳川へいつて立花家のものを見、熊本の細川家へもいつたのを覚えてゐる。

あの頃の研究所はまだ史料そのものを購入したり、寄贈をうけるといふよりは、主として借りて帰つて筆写してゐた。それでも戦争末期には、すべてマヒ状態になつて、停滞してしまつてゐた。

それでも昭和二十年の春に私は金田平一郎教授や、北条、中村、箱島氏と共に呼子にて一泊、加部島にわたり、捕鯨史料をさぐつたのを覚えてゐる。呼子の宿でギイギイと漕ぎ出る舳の櫓音を窓外に聞きながら、磯の香も高い料理に味覚を満喫させたのは、時が時だけに記憶にあざやかである。

戦争当時私は柳川に疎開してゐた。戦争末期から終戦直後にかけて研究生活はまつたくブランクで身を処し、口を糊するだけが関の山だつた。しかし戦後の食料危機にも柳川は割合にめぐまれていた方だつたろう。米も魚も豊富でいまから考えると都合によかつたと思う。あの底い一面のデルタ地帯の景観はいまでもよい追憶に私をさそつていく。

戦後森克己教授が来任され、文化史研究にも有力な一員を得て、萬事活気づいたように思う。しかし九州文化史研究所の仕事は相かわらずであつた。法文学部時代だつたので、法科、文科、経済科のものが共に、協同して運営していた。長い間文科が研究所の仕事に無関心だつたが森克己教授が来られて、仲間に大いにはいつてもらうことにした。竹岡教授はどちらかと言うとあまり九州文化史研究所にも来られず、熱を入れられなかつたように思う。主として金田教授が管理し、運営されていた。克明丹念な人で、のんびりした、つたく悠々せまらぬ態度で研究を楽しんでいられた。

森克己教授と一緒にした初めての旅行は、指宿、坊の津行であつた。昭和二十二年の春指宿に赴き、浜崎太平次家をたづねた。山川へもいつた。そして坊の津では森吉兵衛家などへも行つたものだ。盆節や漁船の史料を見、半生の盆節を喰つたのが印象にのこつている。この時は秀村選三氏も同行された。

昭和二十二年九月の末、金田教授、森教授と私とは秀村選三氏と共に平戸島へいつた。これも文化史研究所の所用としてやへた探訪旅行であつた。この頃から近世庶民史料調査委員会が発足した。私は委員の一人として秀村選三、原田敏丸、作道洋太郎、服藤弘司の諸君と共に担当、積極的に努力した。金田さんはこれの初まつた頃は寝ていられた。

日田の広瀬家や久留米篠山神社架蔵の有馬家文書など膨大なものを手がけたのを始め、田川郡金田町六角家のものをあさり、また筑後川の流域を細かく、「しらみ」

つぶしに渉猟して効果をあげたりもした。浮羽郡山北村の河家文書北のように大切なものを発見したのもこの頃のことであつた。その後六角家文書は秀村君の努力で、九州文化史研究所におさまり、篠山神社の文書は久留米図書館にはいつた。柳川立花家の文書が伝習館に引きつがれたのもこの頃のことであつた。

白杵図書館に稲葉家のものをたずね、大分図書館に府内藩のものをもとめたりもした。熊本図書館の肥後國の檢地帳などはまつたく嬉しくなるものであつた。

竹内理三教授が来任されて、有力な学者を加えて、研究所はまた一時期を劃することになつた。これから研究所も一段と活気を呈し、飛躍したと思ふ。

昭和二十五年四月竹内理三、喜多野精一、森克己氏らと私は対島を調査もた。こゝは史料、古文書の実に豊富を所だ。萩原の萬松院の書庫に保存されているものなど実におびただしい。河内の大浦家の如き、豊崎村の洲河家の如き、大浦礼家の如き実に多量である。佐須奈の武田家、佐護の佐藤家、峰村の三根の田口家、峰村上里の松村家、峰村の島井家、峰村の比田勝家などをたずねた。

昭和二十六年夏、私は吉田教授、秀村選三助教、作道、原田、服藤の諸君と共に天草の史料を採訪した。天草は対馬とくらべると史料の発見は少なかつたが、それでも各地で相当の收穫をなすことが出来た。本渡、御領、富岡、高浜、大江、崎津の各地をめぐり、キリシタンの史料をまとめ、大庄屋の日記を披見し、「御用留」と言うような触書の綴りを見てあるいた。とりわけ御領村の石本勝之丞家の史料は驚くほど豊富であつた。長崎商人の出身でのち姓から幕府の掛屋となり、船を持ち

質屋を行い、新田を開き、塩浜を経営し綿作をなし、手船をもつて大阪長崎への廻船をなし長崎の出店では貿易をもしたと言ふ風に多角経営をなしている。この石本家文書もそつくりそのまゝ全部九州文化史研究所の所有に帰した。秀村助教授のなみなみならぬ尽力によると言ひ。

法文学部が三学部に分れた時、九州文化史研究所をどのようにするかと言ふことで私と金田教授とは頭をなやめ、森さんともいろいろ論議し折衝したものだ。長い間手塩にかけた研究所を文学部だけの所屬のものには金田さんも私もあまりしたくなかつたし、それは不合理に思われた。結局いまのような形のものになり、そして円満に運営されていることは慶賀にたえない。

私ももつと九州文化史研究所の功績や意義について書きたいと思つていたが、最近、実に多忙で寸暇なく、こんなものになつてしまつた。

心から九州文化史研究所の健全なる発展を祈つて筆をおく。

昭和十三年

六月一日 先任粟生又太郎氏のあとをうけて文化史研究所事務囑託の辞令をうけて今日から専務を執つた。

部屋には校正係の井上文学士と事務囑託の岡部庄作氏と自分と合せて三人であつた。日常の事務は古文書、古記録の複写がおもてあつたが、藩政時代のものが多かつた。それで記録の内容を明らかにするためには各藩の領域を知ることが一番緊要である事に気付いたので、まず九州地方の領域地図を作らうと同年十月初旬よりその資料の蒐集にとりかゝつた。

それには寛永年間の藩主の領知安堵書を中心に福岡県としては県史資料挿入の各藩地図、大分県としては郷土史家某（名を逸す）の地図や各県町村について各藩の境界等につき回答を求めて既製の地図に各藩ごとに色別けして下図が出来た。

昭和十四年

八月 筆耕として有富筑太郎氏が雇入れられた。間もなく校正係として大石文学士も任用された。

十月 金田助教教授に随行して大分県日田町広瀬正雄氏を訪問して淡窓先生の遺書遺墨を閲覧した。

十二月二十日 前年より着手して出来た九州各藩色別地図を完成した。

昭和十五年

三月 金田助教に随行して佐賀市多久町の鍋島別邸を訪問して鍋島文書教冊の借用方を契約す。

五月初旬 南海道の各藩領域地図の製作に着手して同年十二月に完成。

六月 金田教授に随行して長崎図書館を訪問して長崎犯罪記録を借用す。

十月 大石文学士、金田教授に随行して対馬宗家管理人を訪問せらる。

十二月 金田教授に随行して肥前大村家邸を訪問、大村文書借用方契約。

大村氏は藤原純友の裔也と

天慶年間伊豫楳藤原純友が叛を起して源経基の征討軍に敗れて肥前に逃れたが其子孫は朝敵の故をもつて大村の姓に改め純の字を用いなかつたが、数代を経て祖先の純の字を冠するに至つたという話を聞いた。

昭和十七年

三月 金田教授に随行して大分県杵築町松平家管理人を訪問。

昭和十八年

六月 中国地方の各藩領域地図の製作を思い立ち、京大図書館に資料を蒐集したるも未完成に終る。

七月 北条、中村両嘱託就任

十月 金田教授、宮本助教に随行して日田に採訪。大石、岡部氏も同行。

昭和十九年二月 退職